
MOTHER2の世界で主人公らしく生きる

余込罪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOTHER2の世界で主人公らしく生きる

【Nコード】

N3775W

【作者名】

余込罪

【あらすじ】

初対面の爺が「君、主人公になってみない？」とか言ってきた。だから主人公になった。エンディングまでたどり着けるかはわからないが、やってみようじゃないか。だけどこの世界なんかおかしいな、まあいいか。

原作とは違う人がその人の位置についていることがあります。そういうのが嫌な人は読まない方が良いです。

ブローグ

「どうしてこうなった…」

さて、なんで俺がこんなことを言っているのかというと、

話は十数分前にさかのぼる…

学校からの帰り道を歩いていた俺は、疲れていたせいか

無意識にビルの工事現場に入って行ってしまい落ちてきた鉄骨に
気付かず、

そのまま鉄骨に押し潰されてしまった。

何故入り口に誰もいなかったのか不思議でならない。

いやそれは今どうでもいい、

そのあと俺は気付けばテンプレ乙な真っ白な空間にいた。

問題はそのあとだ。

今、俺の目の前には首を吊っているにもかかわらず平然としてこ
ちらを見ている爺がいる。

「あ、気付いてくれた。」

「いや、なにやってるんですか？」

「出迎え。」

「誰の？」

「君の。」

「何で首吊ってるんですか？」

「突き詰め過ぎたオリジナリティーの結果。」

「どういうオリジナリティーだよ…」

「これはこういう物なんだよ。」

「あーはいはい、それでなにか用あるんですか？」

「うん、君、主人公になってみない？」

「やはりテンプレ的な用だったか。」

「これからどうなることやら。」

プロローグ2

さて、主人公になってみないかとさそわれたわけだが、

「どこの世界の主人公なんだ？」

これ結構重要だよな。

「MOTHER2だけど。」

「なるほど、ネスになるわけですか。」

「うん、そういうことになるね。」

ということはPSIが使えるわけだ。よし！

「わかりました、なってやろうじゃないですか。」

「そこが判断材料なんだね」

「いいじゃないですか別に。それよりも早くやってくださいよ。」

「わかったよ、じゃあさっそくいってらっしゃい。」

「ん？なんでバット持つてるん」「フン！」「ぎゃあああああああああ
ああ」

「なんでだあああああああ」

「おまけも付けといたから確かめといてねーーーー！」

バットで打つ必要性はどこにあるんだあああああ！

しかもわざわざ腰を打たずともいいだろうに！

ん？なんかでかい穴がみえてきたんだが、もしかあれがテンプレ的なあの転生のあの「スポッ」

プロローグ2（後書き）

言いわすれてましたが主人公は初対面の相手には基本敬語で話します。

第1話 本命よりおまけの方がすごいのはよくあることだと思う

さて、あれからちゃんとネスに転生できたんだが、

未だにおまけと言う物が分からないんだが、いつ分かることやら。

「ネスちゃん！郵便よー！」

おや、誰からだろうか？

「今いくよー！」

さて、先ほど届いた郵便だが、手紙ではなく小包みだった。

そして、差出人の欄にはなにも書いておらず、

包み全体に大きく「おまけ& a m p ;頼み事」と書いてあった。

少し不気味だった。

とりあえず開けてみよう。

包みを破いて出てきたのは、手紙とカップ麺っぽい何かだった。

手紙にはこう書いてあった。

「やあ主人公君、元気かな？」

突然だけど頼み事があるんだ。

一緒に送ったおまけをジャイアントステップで必ず使って置いて欲しいんだ。

絶対にだよ？使つとかないとちよつとまずいことになるからね…

じゃあ頼んだよ。」

あいつからだったか…

にしてもそんなにやばいのかこれ。

ん？なんか書いてあるぞ。

「インスタントきゅうきよくキマイラ」

…うん、これはやばいな。

第1話 本命よりおまけの方がすごいのはよくあることだと思っ(後書き)

きよだいアリ終了のお知らせ

インスタントきゅうきょくキマイラ取り扱い説明書（前書き）

色々と設定があったりする。

インスタントきゅうきよくキマイラ取り扱い説明書

本品の起動方法

- 1、まずカップのふたを開けて水を入れます。
- 2、ふたを閉めて5秒待ちます。
- 3、キマイラがカップから出てきます。

1 キマイラは見える範囲にいる一番邪悪なものに向かって行きますので、

身に覚えのある方はご注意下さい。

2 キマイラを止めたい時は、キマイラが出てきたカップを踏み潰すなりなんなりして、

カップをぶっ壊してください。

3 間違えてお湯を入れてしまうと、本来の数十倍の大きさになつてしまい、

さらに邪悪な物とか関係無く襲ってきますので、

くれぐれもお湯を入れたりしないようお願い致します。

インスタントきゅうきよくキマイラ取り扱い説明書（後書き）

こんな「いつか使うかもしれないから捨てないでよ!」って感じの設定ばかりで大丈夫なのだろうか。

第2話 隠し場所といえはベッドの下や本棚の裏、ただし大掃除の時以外。(前

我ながらくだらねーと思った。

第2話 隠し場所といえばベッドの下や本棚の裏、ただし大掃除の時以外。

あの、真っ赤で

Die 確定な

お口が大きい究極兵器、

略して究極マダオ兵器を手に入れてしまった俺は、

まずその隠し場所に四苦八苦していた。

見える所に置いておくと、

カップ麺に間違えられてしまうかもしれない。

家の外に置けば何かの拍子に壊れてしまうだろう。

悩んでばかりいても何も変わらないので、

とりあえずあの人に電話してみるか。

トゥルルルルル、トゥルルルルル、ガチャ。

「もしもし、パパだぞ。」

「あ、パパ？」

「おお、ネスか。久しぶりじゃないか。」

何か用でもあるのか？」

「そうそう、物を隠すのに良い場所ってなんだろう？」

『はっはっは何をいつてるんだネス。』

男ならベッドの下かクローゼットの中だろう。』

「いや、そう言う物じゃないんだけど。」

『大丈夫だよ。』

男ならいつかそう言う物を読む時期が来るのさ。』

「小学生になにを言ってるんだあなたは。」

だけでもあそういうことにしといて。」

『わかったよ。だけでもあ見られたくないのなら、』

鍵付きの箱にでもしまっておけばいいんじゃないか？』

…その手があったか。

「ありがとう、問題は解決したよ。」

『はは、そうか。じゃあまたな。』

「うん、じゃあね。」

ガチャン、ツーツーッー。

さて、さっそく鍵付きの箱的な物を調達してくるか。

………よし！これで大丈夫だな。

これを開ける時はオネットに隕石が落ちた後だ。しかし…

隕石が落ちる日付分らないんだよなあ。

…まあ待つてればいつかおちてくるだろ。

第2話 隠し場所といえばベッドの下や本棚の裏、ただし大掃除の時以外。(後

パパは1でも2でも頼りになった。

主人公の性格その他（前書き）

原作開始前に書いておきたかった。

主人公の性格その他

名前 ネス - 前世は違った、多分。

性格 過激・親切・DSなど - 人によって見え方が違ったりする。

口調 対初対面・敬語

対公的機関・KEIGO

対仲間 and 家族・タメ口ときどきいじり口調ところによつてはツッコミ

対その他エキストラの皆様・タメ口 + 毒舌 + 爆弾発言

好きなこと ツッコミいじり

これぐらいしか書くことがなかった。

以下文字稼ぎ

まままままままままままままままままままままままままままままま
ままままままままままままままままままままままままままままま
ままままままままままままままままままままままままままままま
ままままままままままままままままままままままままままままま

主人公の性格その他（後書き）

どうも、余込罪です。

突然ですが、感想にてひっさつPKの名前アンケートを取ろうと思います。

1・LOVE

2・とうやこ

3・その他
です。

期間は9月14日の午前0時までです。

てゆーか作者は12日と13日に期末テストがあるのでまともに小説進みません。

なんでこんな時期に書き始めてしまったのやら。

ちなみになにも来なかったら2・とうやこ になります。
とにかくよろしく願いします。

第3話

名前をわざと間違えた時訂正されないと後でどう呼んでいいかわからな

原作開始。

第3話 名前をわざと間違えた時訂正されないと後でどう呼んでいいかわからな

あのマダオ兵器を適切な形で処理してからしばらくたった夜。

俺は、突然聞こえてきたとんでもない音によって目がさめた。

…これ待っていたのは事実だが、

実際に聞くとやはり少しびっくりするな。

とにかく隕石の様子を見に行くか。

もちろん着替えてから。

ガチャ、トットトツツ…

「あら、ネスちゃんどうしたの？」

「ちょっと外を見に行つて来るよ、

どうなってるか知っておきたいしね。」

「わかったわ、いつてらっしゃい。

なるべく早くもどくのよ。」

「了解、いつてきます。」

裏山に来てみれば案の定パトカーだらけであった。

あちこちにある、とおせんぼフェンス（偽）がうっとおしい。

うじゃうじゃいる警官やらおまわりやらポリスマンがウザイ。

さっさと帰りたいなあ。

しばらくしたらやはり道が

とおせんぼフェンス（偽）でふさがれていた。

「おおネスじゃないか。丁度良い、ポーキーをなんとかしてくれ。
うるさくてかなわないんだ、お前達友達だろ。」

「わかりました、ではあのハム男を文字通りミンチにして来ます。」

「いやいや、今の会話のどこからそんな物騒な考えが出て来るんだ
よ。」

「だって、なんとかしてくれ、って、
・なん、でもないかのように、全身を
・と、に、か、くミンチに、・してくれ、。
の略語ですよ?。」

「そんな寄せ集めただけの略語があつてたまるかアアアア！
たとえそんな略語があつたとしてもそれをその意味でとる奴なん
ざいねーよ！」

「いますよ、この宇宙のどこかに。」

「そんな壮大なスケールで考えなきゃなんねーならいねーのと同じ
じゃねーか！」

とにかくポーキー連れてさっさと帰ってくれ。

ミンチにはなくていいから、むしろしないで下さいお願いします。
す。」

「わかりました、ミンチにはせずに連れて帰ります。できれば。」

「できればってどっちのできればなんだよオオオオオ！
頼むから安心させてくれエエエ！」

落ち着きのない人だなあ。

まあいいやさっさとポーキーを引き取ろう。

「おいコーギー、てめーここで何してんだ。」

「なんだネスじゃないか。お前がいるから警察の皆様の邪魔になっ
てるじゃないか。」

俺はいいけどお前が邪魔なんだ。

あとコーギーじゃないポーキーだ。」

「何言つてんだブーギー、寧ろお前が邪魔になってるじゃないか。
というわけで帰れ。」

スチャ。

「あのーネスさん？その肩に構えているバットは一体…？」

「俺愛用のバットだ。振った後折れないかどうか心配だが。とにかく逝ってこい。」

「いつての字が違う気がする」「ぶっ飛べやアアア！」あとプーギーじゃないポーキーだアアアアア…」「キラーン

任務完了、これより帰投する。

第3話 名前をわざと間違えた時訂正されないと後でどう呼んでいいかわからな

おまけ…そのあと

ネス「すいません、結局どっちも無理でした。」

おまわり「いやなにをしたアアアア!？」

おまわりはポーキーがふっ飛ばされた所を見ていません。

あと、ギャグ補正のおかげでポーキーは今日も元気です。

アンケート進行状況

1 - 0

2 - 0

3 - t a n a s i n n 2票

アンケート追加（前書き）

すっかりわすれていた。

アンケート追加（後書き）

きゅうきよくキマイラ出すなよ！絶対出すなよ！
いないと思いますけどね。

第4話 ノックで出せない音を出すのはセールス術の基本って誰かが言ってた

五日後の

期末テストに

絶望す

集中できずに

小説に走る

余込罪

第4話 ノックで出せない音を出すのはセールス術の基本って誰かが言ってた。

ポーキーをふっ飛ばした後、俺は家に帰って再び眠りについていた。

そして時は消し飛び…

ドン！ドン！ドンドンドン！ドンドンドンドンドンドンドン！
タッタララーラ、タッタ！

…やれやれ誰だよこんな時間に。

眠いが我慢してうるせー奴をしばきにいくか。

トットトットッ…

「あらネス、丁度いいちよつとでてちょうだい。」

「りょうかい。」

ドン！ドン！ドンドンドン！ドンドンドンドンドンドンドン！
タッタララーラ、タッタ！

「はいはい今ですよ…ってなんだ、ジャージーじゃないか。何か
ようか？」

「ネ、ネ、ネス！助けてくれ、ピッキーがどっかいつちゃったんだ。さがすを手伝ってくれよ、俺達友達だろ。後ジャージーじゃないポーカーだ。」

「まあいいけどよ、ちょっとママに知らせてくるわ。」

何か言っとかねーと帰った後大目玉だからな。

「ママ、ちょっと…」

「あらネス、何も言わなくていいわ
ママは全部わかってるつもりよ。」

とりあえずホライゾン連れて行きなさい。
きっと何かの役に立つわ。」

「了解、ママ。」

さてホライゾンはどこかな…っ

「おっ！おっおっおっ？（あっ親分！あっしに何か用事がお有りでしょうか？）」

「ポーカーの弟がどっか行っちゃったらしい。
一緒にさがすことになったのでついて来い、以上。」

「おっ！おっおっおっ！（了解！ついて行かせていただきます！）」

ホライゾンはネスの舎弟と化していた。

そんなことがあり、ピッキーをさがしに出たわけだが…
前に来た時とは違い、動物がおそつてくる。
片っ端からバットで粉砕してるけどな。

動物保護団体に訴えられるかもしれないのでカット

「…よし！隕石の所までついたぜ。」
ホライゾンの野郎、途中で逃げ帰りやがって…。

「まったくピッキーの奴どこにいるんだよ。」

そう、まだピッキーは見つかっていな…ってあれはまさか…。

「おいポーカー、あそこにいるのピッキーじゃねーか？」

「まじか！？おいピッキーこんなとこで何やってんだよ！」

「そっちこそなにやってんだよ兄ちゃん！勝手にどっか行っちゃまって！さがしたぞ！」

「…ポーカーよ、一人で勝手にどっか行ったら上、弟にさがされてい

たという事実になにか一言。」

「まあ待て、何か聞こえないか？」

「話を逸らしたな。」

「逸らしたね。」

「いや、そういう事じゃなくてだな。」

ん？本当に何か聞こえるな、虫の羽音みたいな音が。

「ねえ、何か降りてきたよ！」

ピッキーの言葉に反応し、上を見るとコガネ虫のようなものが降りて来た。

そいつは次の瞬間こういった。

「え〜っと、ここどこですかあ？」

…やけにぼわつとした口調だなあ。

第4話 ノックで出せない音を出すのはセールス術の基本って誰かが言ってた

この小説のあの人（虫）はちょっと違います。

モデルは某巨乳未来人さん。

第5話 追撃って聞くと一撃だと思ってしまつのはなぜか（前書き）

現在ウィンターズ編の冒頭までの流れができている。

第5話 追撃って聞くと一撃だと思ってしまつのはなぜか

あれから色々と虫の人から話を聞いた。

彼女は朝比奈みくるさんと言うらしく、

いまから10年後の未来からやって来たらしい。

明らかに俺が知っているMOTHER2の正史とは違う。本来ならここはブーンという虫がくるはずだ。

どうやらこの世界はあくまでMOTHER2の世界に似た世界のようなのだ。

まあそんなことはどうでもいいんだがな、楽しめそうだし。

話をもどすが、他の内容はほとんど原作と同じく、3人の少年と1人の少女が世界を救う云々だった。無論ほとんど聞いてなかった、知ってたし。

とりあえず今は全員でポーカー達の家に向かってところだ、こいつら送り届けなきゃならんし。

そういえばこの後誰か来たような気がする」「皆さん！止まって下さい！」「そうらきた。

「どうかしましたか？朝比奈さん。」

「何か来ます！皆さん気をつけて！」

朝比奈さんがそういった後、目の前にいきなり、いけ好かない顔をした男が現れた。

「ふん、ようやく見つけたぞ朝日奈みくる。」

まさか死に際に虫に自分の意識をコピーして過去へ渡るとはな。
だがお前もここでおわりだ!」

「あ、あなたは…!」

「誰です?あの人。」

「あの人は未来からやって来た殺し屋ですう。」

おそらく私が邪魔になったので消しに来たんだと思います…。」

それにしては来るの早くな?

「その通りだ朝比奈みくる。」

ふん、そっちは子供の救世主か。

どれが救世主かは分らんが、全部殺れば良いことだ。」

「そう簡単に殺られるかよ!」

「ふん、どれぐらいもつのやら…。」

せいぜい頑張るがいい。」

「ヒイヒイヒイ!お助けえええええ!」

「ポーキー、お前は下がってろ!」

「死ね!PKフリーズα。」

オウフ、危ねえ。

「あなた達！私から離れないで下さい！
サイコシールドΣ！」

「しまった！サイコシールドを張られちゃった！」

殺し屋なのに相手のことを詳しく知らないとか阿呆なのか？
ともかくこれで流れ弾は大丈夫だな。
俺も朝比奈さんだけに任せずそろそろ攻撃に移ろう。

「くらえ！誰にも知られずに採取しておいた隕石の欠片を埋め込んだバット攻撃イイイイ！」

「「いやいつの間にやったんだアアア！」」

「グッハアアアア！」

間を開けず追撃！

「ソイヤアアア！」SMAAASHAH！

「ち、ちくしょう…ぐふつ。」

ありや、原作より弱っちくないか？こいつ。まあ別人だしこんなもんか。

「ネ、ネスってこんなに強かったのか…。」

「そ、想像してたよりかなり強かったです。これなら…」

「とりあえず、終わったんだからポーキーの家にいこうぜ。」

「お、おう。」「あ、はい!」

用済ませてさっさと帰りたいなあ。

第5話 追撃って聞くと一撃だと思ってしまつのはなぜか（後書き）

さすがに内容が色々アレなので少し直しました。

作者は勉強しなきゃいけないのに何やってんでしょっ…

第6話 友達の親は礼儀をしっかりとすれば結構仲良々できる（前書き）

アンケート結果

t a n a s i n n に決定

第6話 友達の親は礼儀をしつかりすれば結構仲良くできる

身元不明の未来の殺し屋を倒してからは、
何事もなくポーキーの家の前までたどりついた。

「すいませーん、お宅のガキどもお届けにまいりましたー。」

「あらお隣さんとこの子じゃない、
うちの子達連れて来てくれたのね。

こいつらうちの人の所まで連れてってやって。」

「わかりました。ていうかお前らいつまで俺の後ろにいるつもりだ。」

「うるさいぞ！後勝手に決めるなよ！」

お前もうるせえよ。後暑いからいい加減だけ。

「ポーキー、あたしからもお仕置き食らいたいかい？」

「何でもございません、マイマザー。」

変わり身速いな、まあわからないでもないが。

「よろしい。ほら！さっさと行きな！」

「というわけでさっさと行くぞ、ポーキー。」

「ちくしょつ。」

諦めるポーキー、それがお前の運命だ。

ミンチ家のリビングに到着したので早速ミンチ氏にこいつらを引き渡す。

「ミンチさん、お宅のガキどもを連れて来ました。」

「おおうちのガキどもがすまなかったね、ネス君。
二人共お仕置きだ！」

「「ギャー——！」」

「こら待て二人共！」

パンパンパパンペシペシパパン！

痛そうな音だ…

どんだけ叩いてんだあの人は。

「ふう、一人五十回交互2セットはちょっと少なかったかな。」

いや十分多いでしょうに。普通の子供は我慢すら出来ませんよ。

「あのー、俺もう帰っていいですか。」

「ああ、ちよつと言伝を頼まれてくれないか？」

「なんです？。」

どうせ伝えないが、聞く素振りだけしておこう。

「君の親御さんに”いい加減

(省略)

だから。”と伝えてくれ。」

「わかりましたよ。伝えときます。」

聞くだけでも結構面倒臭いな。

「朝比奈です。今までずっと空気でした。」ブ・ンブ・ン

「いきなり何を言い出すんです、朝比奈さん。」

「今までの素振りすらなかったですから…。」ブ・ンブ・ン

「あ、リードナさんどうかしました？」

「また空気の危機です！」ブ・ンブ・ン

大丈夫じゃないか？羽音うるさいし。

「いやね、あの人昔から呆れるほどお人好しでさあ、正直者には損しかないのかねえ。

おかげでうちはこんな貧乏暮らしよ…。」

貧乏？裕福の間違いだろ。

「貧乏なんて縁のなさそうな暮らしですよ、これ。」ブ・ンブ・ン

そうですね、って結局空気じゃないじゃん。

「それもそうですね。」ブーンブーン

「キィー！うるさいっ、死んで地獄へ行けこの虫けら！」

バシン！

「ゴフウ！」

「あ。」

勢い良く叩きつけられたなあ、ていうか何故潰れていない。

「大丈夫ですかー。」

「カハッ…や、やはりこの体は弱かったようですね…。」

そりゃそうだ、見た目ハエっぽいもの。

「このまま私は死ぬでしょう。」

「へえそれで？」

「やけに軽いですね…。」

軽いのが俺ですしそんなこといわれても。

「と、とにかくあなたは私にかまわず冒険の旅に出なければなりません。」

「りょうかーい、それじゃ行ってきたま」あ、ちょっと待って下さい
！」

…なんですか。」

人の話を途中で切るなと言われなかったのか？

「とても重要な事を思い出したので聞いて行って下さい！」

…アレのことだよな、多分。

「で、内容は何なんです？」

「それはですね……」

第6話 友達の親は礼儀をしっかりとすれば結構仲良々できる（後書き）

10月22日 修正

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3775w/>

MOTHER2の世界で主人公らしく生きる

2011年11月15日11時31分発行